

2005年7月10日 聖霊降臨節第9主日礼拝

「再出発」

(イザヤ6章1～8、使徒言行録15章36～41)

聖霊に導かれて、教会は励ましに満ちた決定をしました。たとえモーセの律法や割礼はなくとも、イエス・キリストを信じるなら、どんな人も救われる。神様は決して人を分け隔てなさらない。イエス・キリストを信じるならば救われる。だから「偶像に献げられたものと、血と、絞め殺した動物の肉と、みだらな行いとを避け」なさい。教会は、慰めに満ちたこの決定を手紙にしたためて、各教会に送りました。ユダとシラスがこの手紙を託されて、パウロとバルナバと一緒に出発しました。この手紙は、行く先々の教会で歓迎されました。信仰に生きる兄弟姉妹たちは、この知らせに励まされ、信仰を強められていったのです。

それから数日経ったある日のこと、パウロがバルナバに言いました。「さあ、前に主の言葉を宣べ伝えたすべての町へもう一度行って兄弟たちを訪問し、どのようにしているかを見て来ようではないか」。第一伝道旅行が終わるときも、パウロとバルナバはそうしました(使徒14章21～28)。「リストラ、イコニオン、アンティオキアへと引き返しなごら、弟子たちを力づけ」、「信仰に踏みとどまるように励まし」たのです。今度もパウロは、同じようにしたいと考えました。聖霊に導かれて教会が下したあの決定、恵みに満ちた決定を、以前伝道した町や村にも知らせたい。そう考えたのかもしれませんが。この計画がきっかけとなって、この訪問はやがてパウロの第二伝道旅行へと発展していきます。

ところがこの計画が、思いがけない事態をもたらします。パウロの意見に賛成したバルナバは、それならマルコと呼ばれるヨハネも一緒に連れて行こうと提案します。マルコというのは、バルナバのいとこです(コロサイ4章10)。しかしパウロは、この提案に真っ向から反対します。理由は38節にあるとおり、「しかしパウロは、前にパンフィリア州で自分たちから離れ、宣教と一緒に行かなかったような者は、連れて行くべきではないと考えた」からです。そのときのいきさつが、使徒13章13節に出ています。「パウロとその一行は、パフォスからパンフィリア州のペルゲに来たが、ヨハネ(と呼ばれるマルコ)は一行と別れてエルサレムに帰ってしまった」。このときのことをパウロはずうっと覚えていました。神様から与えられた伝道の務めを途中で放り出すような者を、今度の伝道旅行に連れて行くわけにはいかない。そう言って反対したのです。ギリシア語の原文をみると、このときのパウロが、マルコに対していらだっている様子、さらに怒りすら覚えている様子が、よく伝わってきます。

マルコを連れて行く、連れて行かないで、パウロとバルナバは、激しく言い合いました。もはや収拾はつきそうにもありません。結局、二人は別れて、別々の行動を取るようになってしまいました。

教会が、聖霊に導かれて、喜ばしい決定を下したばかりなのに。神は人を決して分け隔

てなさない。神の前にはユダヤ人も異邦人の差別はなく。ただイエス・キリストの恵みによって、だれもが救っていただける。恵み深い福音の奥義を、全教会が心をあわせて確認した、そういうときに、不幸な争いが教会に起こってしまうとは。正直とまどいを隠せません。けれども、これが人間なのだ思います。聖書には、神様の愛と赦しに満ちた素晴らしい世界が、たくさん証しされています。しかし同時に、わたしたち人間の愚かさ、醜さ、かたくなさを、聖書は包み隠さず明らかにします。聖書は、決して美談の本ではありません。こんなにもみにくく、あらそいに満ちたわれわれ人間を、神様は決して見捨てない。罪の深みにはまり、おぼれていくわたしたちを、神は憐れみの目で見つめ、清らかな手ですくい上げてくださる。それが聖書の描く世界です。神様の聖なる御手は、汚れに満ちたわたしたちに間違いなく捕らえ、清めて、ついには光の世界へとわたしたちを導き出してくださるのです。光と闇、善と悪との対決は、神様の完全な勝利に終わります。人類の歴史の中で繰り返されてきた、壮大な救いのドラマが証しされている。それが、聖書という書物です。

さて、パウロとバルナバに目を向けましょう。二人は、なぜ衝突してしまったのでしょうか？ 互いに歩み寄ることはできなかったのでしょうか？ 双方に、弱さがあったのだと思います。伝道の務めを途中で放り出してしまう者など連れていけるか、というパウロの気持ちはわからないではありません。でも、どうしてマルコは伝道旅行の途中でエルサレムに帰ってしまったのでしょうか？ その理由を聖書は語りませんが、何か抜き差しならない事情があったのかもしれませんが。そのへんをもう少し考えるゆとりはなかったのでしょうか？ マルコに対するパウロの見方は、本当に正しかったのか？ はたまたマルコへの配慮は果たして十分であったのか？ 考えさせられます。

他方バルナバの方はといえば、マルコは彼のいとこであったといえます。すると、どうしてもマルコを連れて行きたいというバルナバの思いは、どこから来ていたのでしょうか？ 伝道者として、信仰者としての適切な判断からか。それとも身内を引き立てたいという、公私混同ではなかったか？ 聖書は、パウロとシラスの伝道については、「主の恵みにゆだねられて出発した」と記していますが、バルナバの方は、いとこのマルコを連れて、ふるさとのキプロス島に向かったという事実だけを伝えています。パウロが、初対面に近いシラスを選んで、故郷タルソから離れるようにして、新しい伝道地に向かったのとは対照的です。

そもそもパウロもバルナバも、「信仰の問題」で衝突した訳ではありません。使徒 15 章にでてきた最初の教会会議、エルサレムでの教会会議の結果を、二人は喜びをもって受け入れました。そして二人で一致協力して、この決定を諸教会に伝えて歩きました。信仰の内容をめぐる、二人の間に亀裂が生じたわけではありません。そもそもこの二人は、かなりの期間を共に過ごし、心から信頼し合って、伝道に励んできたのです。よい時ばかりではありません。行く先々で冷たくあしらわれたり迫害されたり。異教の偶像礼拝との戦いに、二人は信仰の友として、戦友として、これまで苦楽を共にしてきたのです。その二

人がどうしてこんなことになってしまったのか？ 本当に悲しいことです。決して二人の信仰が違ってしまったからではない。神・キリスト・聖霊への信仰告白が揺らいでしまったわけではないのです。むしろ二人とも、信仰に堅く立っており、新たな伝道に意欲を燃やしていました。では何が二人の間を裂いてしまったのか？ それは人間としての弱さ、罪深さです。われわれは、あのパウロが本当にそんなことを言ったのか？と思います。あるいは、あのパウロが言うからには間違いない。マルコやバルナバの方に問題があったのだらうと決めつけたくになります。けれども聖書は、そういう決めつけを避けています。おそらく双方に問題があったのです。

この出来事が聖書に書き留められたのは、信仰に生きるすべての人へのいましめ、警告です。あのパウロですら、同じ信仰に生きる者に対して、決めつけや行き過ぎをすることがあったのだとしたら、ましてわたしたちはどうでしょうか？ せっかく神様がわたしたちを集めてくださり、一人のキリストによって救われたのなら、信仰の一致をめざしたい。主の下で一つとなっていくことの方を、わたしたちは望みます。

さて、この後二人は、いえパウロとバルナバ、そしてマルコの三人は、どうなったでしょうか？ 聖書に書いてあるとおり、この後パウロとバルナバは各々、別々の行動をとるようになります。すなわちバルナバは、いとこのマルコを連れて伝道に出発し、生まれ故郷のキプロス島目指して船出をします。他方パウロは、バルナバの代わりにシラスを選び、「兄弟たちから主の恵みにゆだねられて」、新しい伝道旅行に出発します。「そして、シリア州やキリキア州を回って教会を力づけ」ました。この旅の途中でパウロは、やがて生涯の友、信仰の子どもとなるテモテと、まもなく出逢うことになります。

あれだけ悶着のあった二人ですが、パウロもバルナバも、それぞれちゃんと伝道に出かけています。そして行く先々で、神様に導かれ、それぞれに伝道の実りを与えられていきます。二人が衝突した理由、わたしたち人間が誰しも抱えている罪の弱さ、その弱さが二人の蜜月を過去のものにしてしまったのは事実です。にもかかわらず、神様の救いの計画は、わたしたちの弱さやかたくなさをこえて、前進していきました。これが、今朝の聖書のメッセージです。

わたしたちは、つい弱気になって、こう思ってしまいます。こんな軋轢や衝突が教会にあったら、伝道も礼拝もあったものではないと。ささいなことで、信仰者同士でももめてしまうとしたら、こんなわたしたちに、どうしてキリストを証しすることなどできようかと。

しかし、神様の見る目は違います。この後聖書をみますと、こういうことがあったにもかかわらずパウロは、バルナバのことを、終生、キリストの使徒として、尊敬し続けていたのがわかります。このことは、やがてパウロとバルナバの仲直りへとつながっていきます。またマルコについては、後にパウロがこう呼んでいます。「わたしの協力者、マルコ」。そうやってパウロは、マルコに心から祝福を送っています(フィレモン 24~25)。そしてテモテの手紙二では、はっきりこう書いています。「(わたしのところに)マルコを連れてき

てください。彼はわたしの務めをよく助けてくれるからです」(テモテ二4章 11)。最初はあれほど嫌っていたのに、今やパウロは、マルコがいてくれるのは神の助けだと、感謝するまでになります。神様に救われた者、キリストを宣べ伝える者同士の信頼と友情が生まれていきました。そうなるまでに何があったのか？ 聖書は具体的なことは何も語りません。けれども、このことだけは確かです。神様が二人を、いえ三人を一つにしてくださいました。このことだけは確かです。

イザヤ書6章に、こうあります。「災いだ、わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。…しかもわたしの目は主なる万軍の主を仰ぎ見た」。神様を仰ぎ見る資格などわたしにはない。そう言ってイザヤは神の前にひれ伏しました。しかしそのイザヤに、主は語りかけました。「見よ、これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り去られ、罪は赦された」。「誰を遣わすべきか」。「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」(以上、イザヤ6章5～8より)。このとおり、神は、ふさわしくない者があるがままで召し出し、きよめて神の御旨に用いられます。わたしたちは、本当はふさわしくないのです。けれども、主の御手が触れてくださるなら、わたしたちは清められます。主の聖なるご用に仕えるうちに、だんだんとふさわしい者へと変えられていきます。

パウロとバルナバ、マルコの間柄は、もし神様抜きであれば、決して修復されることはなかったでしょう。しかし、主なる神がおられたがゆえ、わたしたちの罪を背負って、わたしたちのために十字架にかかれたキリストがおられるがゆえ。三人は、主の憐れみにより、さまざまな欠点や弱さを乗り越え、キリストの下で遂に一つになることができました。本当の友情と信頼に向かって成長させられていきました。同じことが、わたしたちにも起こります。神様は、いつ、どこからでも、信仰の再出発をさせてくださいます。主の約束を信じて、神様の慈しみ深い御手に守り導かれて、わたしたちも、新たなる一致と協力へと前進させていただきましょう。「わたしの協力者たち、マルコ、アリストアルコ、デマス、ルカからもよろしくとのこと。主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように」(フィレモン 24～25) [説教者：堀地正弘牧師]